

南琉球黒島方言と宮良方言の親族名称と呼称

荻野, 千砂子
福岡教育大学 : 准教授

<https://doi.org/10.15017/4783566>

出版情報 : 語文研究. 130/131, pp.483-470, 2021-06-02. 九州大学国語国文学会
バージョン :
権利関係 :

南琉球黒島方言と宮良方言の親族名称と呼称

萩野 千砂子

1 目的と調査地点の概要

本稿では、南琉球の竹富町黒島（くろしま）方言と、石垣市宮良（みやら）方言の親族名称について考察する。黒島で兄弟の親族名称を尋ねると、長男は ubu-sje(e)（ウブシェー）、次男は naha-sje(e)（ナハシェー）、三男以下は方言がない、末弟は buza-ma（ブザマ）と回答される（以下、複合語形式の場合、形態素境界を - で示す）。また、長女は ubu-na（ウブナ）、次女は naha-na（ナハナ）、三女以下は方言がない、末妹は boo-ma（ボーマ）と回答される。三男や三女以下に親族名称がなく、末子に親族名称があるという点で体系として特異に感じる。そこで本稿の第一点目の目的は、兄弟姉妹の親族名称の使用実態を確認するとともに、親族名称の体系を明らかにすることとする。その際、約90年前の宮良當壯（1930）『八重山語彙』に見られる語彙を参照した。また、親族名称の呼称としての用法を調べていると、下から上の者への呼称だけでなく、上から下の者への呼称としても使用されることがあった。共通語では、兄が弟を呼ぶときに「*弟！」と親族名称で呼びかけることはできない。そこで第二点目の目的は、親族名称の呼称としての用法を明らかにすることとした。

ここでまず、調査地点の概要を述べる。黒島は、竹富町の島の一つである。島内には、宮里（みやざと）、仲本（なかもと）、保里（ほり）、東筋（あがりすじ）、伊古（いこ）の5つの集落がある。集落ごとの特色があり時折方言が異なる。また、石垣方言と黒島方言との差は大きい。宮良集落は石垣市街地の中心部から東へ8kmほど離れたところに位置する。宮良方言と市街地の石垣四箇（しか）方言とも方言差がある。理由は、小浜（こはま）からの移住者によるものである。約250年前の1771年に明和の大津波が起り、宮良村は甚大な被害を受けた。津波前の人口は1,221名だったが、津波により1,050名が溺死し、生存者は171名だったと言う。壊滅的な被害からの復興として小浜島からの強制移住が計画され、320名が移住したとの記録がある。^(注1) よって、現在の宮良方言は「元の宮良と小浜と石垣と沖縄（本島）の方言が混ざっている」状態だという。石垣四箇には、琉球王府の役人が多く居住していたため、士族語か平民語かという位相差もある。

2 調査方法と話者と調査期間

調査方法は、最初に調査協力者（以下、話者と呼ぶ）の親族関係を聞き取り、親族名称を確認した。その後、「私」（調査者自身）が六人の兄弟や姉妹の末子だと仮定し、写真を見せながら友人に「これが長兄です」と兄や姉を紹介するときの親族名称を尋ねた。また、「私」が六人の息子や娘の親である場合も仮定し、友人に写真を見せながら、「これが長男です」と紹介するときの親族名称を確認した。また、呼称に関しては、下から上の者へ使う場合と、上から下の者へ使う場合の両方を調査した。

黒島方言の話者は、保里の昭和10年生まれの男性（85歳）、東筋の昭和14年生まれの男性（81歳）である^(注2)。調査期間は2020年12月から2021年1月の間に、電話による調査を7回行った。宮良方言の話者は、昭和8年生まれ男性A氏（87歳）、昭和10年生まれの男性B氏（85歳）、昭和15年生まれの男性C氏（80歳）、昭和23年生まれの男性D氏とE氏（72歳）である（以下、話者Aのように表記する）。調査期間は2020年11月から2021年1月の間に、電話とZoomを利用して11回行った。以下、用例は簡易的な音素表記で書く。中舌母音 [i]（音声は前舌寄り）は I、[ɛ] は c、[dz~z] は z（[i] の前では [ɟ] ~ [z]）、成節鼻音は N、促音は子音を重ね、長母音は母音を重ねて表記する。接語境界は = で示した。二行目に文法情報を、三行目に共通語での直訳を書き、非文法的な用法の場合は * 印を付す。また、* 印は現在の当該地域に見られない形態にも付した。

3 兄弟姉妹を表す親族名称

3.1 黒島方言の兄弟姉妹を表す親族名称

調査者の「私」が六人兄弟の末子であると仮定し、友人に写真を見せながら兄弟を紹介するときに、どのような親族名称を使用するかを尋ねた。結果が（表1）である。長兄は ubu-sje(e) で、形態素は ubu と sjee に分かれる。sjee は独立しても用いられ、兄の意味を表す。兄総称では、siza（シザ）も用いる。sjee の音声は、単独では sje.e と 2 モーラで発音されるが、全体のモーラ数が長くなると、sje と短呼化することがある（以下、複合語形式の場合は短呼化した sje で表記を統一する）。sjee は本土の古代語「兄（せ）」との関係が考えられる。形態素 ubu は接頭辞で「大きい」の意味であり、古代語「おほ」との関係があるだろう。[oɸo] が狭母音化によって、[uɸu] となり、[ɸ] が有声音化して [ubu] となったと推測する^(注4)。よって、直訳すると ubu-sje は [大兄] となる（以下、直訳を [] で表す）。次兄を表す naha-sje の形態素 naha [中] は、独

立して用いることもできる。黒島方言では k 音が h 音に変化するため *naka が元の語だと考えられ、直訳すると〔中兄〕となる。接頭辞（語）ubu、naha を用いて兄の順位を表す語構成となっている。

（表 1）黒島方言の兄弟姉妹を表す親族名称

	集落	兄総称	長兄	次兄	三兄	四兄	五兄	末
兄弟	保里	sjee siza	ubu-sje	naha-sje sjee-ga	naha-sje		naha-sje sjee-ma	私
	東筋	sjee siza	ubu-sje	naha-sje	sjee-ma	sjee siza		
	1930年	シエー シジャ	ウブシエー	ナハシエー			シエーマ	
姉妹	集落	姉総称	長姉	次姉	三姉	四姉	五姉	末
	保里	NNnaa	ubu-na	naha-(N)na				私
	東筋	NNnaa	ubu-na	naha-na	NNna-ma	NNnaa		
	1930年	記載なし	ウブナ	ナハナ			シナーマ	

保里では次兄を sjee-ga（シエーガ）とも言う。形態素 ga は接尾指小辞だが、黒島方言で他の語には管見の限り後接しないため、sjee-ga で一語化していると考え。sjee-ga は東筋にもあるが、sjee と同じく兄の意味になる。保里では三兄、四兄、五兄は「中の兄さん」のため、すべて naha-sje と言え、下から二番目の兄を sjee-ma（シエーマ）と呼ぶ。形態素 ma は「小さい」を表す接尾指小辞であり、sjee-ma は〔小兄〕となる。一方、東筋では sjee-ma は三兄を指す。四兄以下は、「名前 + sjee/siza」か、単に sjee、siza〔兄〕で呼ぶ。

姉妹の親族名称も同様に確認した。姉総称は NNnaa（シーナー）と言う。長姉 ubu-na は、形態素 ubu に姉を表す NNnaa が融合し短呼化したと考えられ、直訳すると〔大姉〕である。次姉 naha-na は〔中姉〕である。naha と NNnaa が融合して短呼化したと考えられる。保里では naha-Nna（ナハンナ）と発音することもある。保里では、三姉、四姉、五姉はすべて naha-(N)na〔中姉〕である。だが、東筋では三姉を NNna-ma（シーナマ）と言い、四姉、五姉は、「名前 + NNnaa」か、単に NNnaa〔姉〕を用いると言う。

これらの語と『八重山語彙』に見られる黒島方言の親族名称とを比較する。（表 1）に「1930年」と刊行年を明記し、カタカナで書き入れた（以下、すべての表で同じ）。シエーやシジャが「兄」、ウブシエーが「長兄」、ナハシエーが「仲兄」、シエーマが「末兄」、ウブナが「長姉」、ナハナが「仲姉」、シナーマが

「末姉」とある。三兄や三姉に関する記述はない。現在と異なる点は、末姉の発音が現在は NNna-ma である点と、NNna-ma の意味が保里で末妹を指す点である。これ以外は、90年前とほぼ同じであると言える。

次に親族名称の体系について考察する。三兄以下は親族名称がないという体系の実態は、「大兄>中兄>中兄>中兄>小兄」(A>Bは、Aが年上であることを示す。以下、同じ)のような、長子と末子を固定する体系であることが分かった。間を中子と称すと、「長子、複数中子、末子の三分割体系」である。一方、東筋では「大兄>中兄>小兄>兄>兄」となり、上位三名を順位付けする体系となっている。このような体系を、「長子、次子、三子の上位順位付け体系」と呼ぶことにする。

3.2 宮良方言の兄弟姉妹を表す名称

3.2.1 兄弟の場合

宮良方言の話者ごとの回答を(表2)にまとめた。

(表2) 宮良方言の兄弟の親族名称

話者	兄総称	長兄	次兄	三兄	四兄	五兄	末
A	sizja	hu-cca aaza	naka-cca	aazjaa-ma			私
B	sizja	ujaa uujaa	naga-bijaa	bija-ma	名 + aazja-ma		
C	sizja	aazaa sizja	naka-cca	azjaa-ma	名 + azjaa-ma		
D	sizja aaza	aaza	naka-cca	azjaa-ma	? 名 + aazaa		
E	sizja	hu-ccaa	naka-ccaa	ga-ccaa	? 名 + niinii		
1930年	兄総称	長兄	仲兄	三兄	四兄	五兄	
石垣	アジャ シイーザ ^{※1} シジャ	フッチャ シイーザ	ナカッチャ ガッチャ	アジャ	アジャーマ	グマアジャーマ	
西表	シザ	アッチャー	ガッチャー			ガッチャーマ	
小浜	ビヤ	ウーヤ	ナクヤ			ビヤーマ ^{※2}	
鳩間	アーザ	ウビラ ウボーザ	ナカーザ			アーザマ	

※1 凡例によると、シィは [si] の音声を表す。

※2 ビヤーマだけでなく、アマーマにも「末兄. (小浜)」と記載されている。しかし、アマーマは「末姉」の誤記ではないかと考える。

兄総称は sizja (シジャ) であるが、親族名称のときにはほぼ用いられない。話者AとEは長兄を hu-cca(a) (フッチャ(一)) という。兄の形態素として *accaa が想定される。「おほ (大)」を意味する形態素 uhu と兄を表す *accaa が融合した形式で、直訳すると〔大兄〕である。話者Aは、hu-cca は石垣の士族語で、aaza は平民語だと指摘する。次兄の naka-cca(a) (ナカッチャ(一)) は、形態素 naka と *accaa が融合した形式で〔中兄〕となる。話者Bは、長兄を ujaa (ウヤー)、もしくは uujaa (ウーヤー)、次兄は naga-bijaa (ナガビヤー)、三兄は bija-ma (ビヤマ) と言う。長兄の ujaa は、形態素 uhu と *bijaa の融合した形式だと考える。兄を表す形態素として *bijaa (ビヤー) もあるということだろう。話者CとDは、長兄に aaza(a) (アーザ(一))、sizja を用いる。uhu〔大〕がなくても長兄を表せる。次兄は naka-cca〔中兄〕である。三兄は話者Bを除き、a(a) zjaa-ma (ア(一)ジャーマ) である。兄を表す形態素 *a(a)zjaa に接尾指小辞 ma がついた形式であり、直訳すると〔小兄〕となる。四兄、五兄を、話者Aは、aazjaa-ma でよいと言う。話者BとCは、三兄と区別するために、「名前 + aazjaa-ma/azjaa-ma」と言えばよいとする。三兄以下は〔小兄〕である点は同じである。話者DとEは、よく分からないという返答だったので、表に?印をつけた。以上、複合語形式での兄を意味する形態素として *accaa、*bijaa、*a(a)zjaa が想定されたが、現在、いずれも独立しては使用されない。

そこで、宮良當壮 (1930) 『八重山語彙』に記載されている語彙を参照し (表2) にまとめた。^(注8) 西表にアッチャーが長兄を表すとの記載がある。また、小浜に、兄を表すビヤがある。石垣に兄を表すアジャや鳩間にアーザが見られる。このように、八重山全体を見ると、兄を表す形態素として、アッチャー、ビヤ、アジャ、アーザと、複数の語があったことが分かる。宮良ではこれらの複数の形態素が、複合語形式の中で混在して使用されている状況だと言える。これは、それぞれの家系により異なるのだろう。また、話者Eは三兄を ga-ccaa (ガッチャー) ではないかというが、石垣や西表を見ると、次兄の naka-ccaa が音声変化した語形だと考える。^(注9)

さて体系を考えると、宮良では「(大) 兄 > 中兄 > 小兄 > 小兄 > 小兄」となり、「一番目、二番目、三番目以下」の三分割となっている。よって、これを「長子、次子、三子以下の三分割体系」と呼ぶこととする。比較のために『八重山語彙』の石垣の欄を見ると、黒島とも宮良とも異なる体系となっている。三兄のアジャは、「兄。普通には三番目の兄を云ふ、あせ (吾兄) の転」との説明がある。長兄はフッチャ〔大兄〕、次兄はナカッチャ〔中兄〕で、接頭辞 (語)

〔大〕〔中〕を付すのに対し、アジャは単独で三兄を表す。四兄はアジャーマでアジャ〔三兄〕に接尾指小辞 *ma* をつけ「小さい三兄」で表し、五兄はグマアジャーマで、形容詞 *guma-saN* (小さい) の語幹を接頭辞として加え「小さい小さい三兄」^(注10) で表す。三兄以下はアジャに接尾辞や接頭辞をつけ、〔小〕を重ねることで「大兄>中兄>兄>小兄>小小兄」と、すべてに順位付けを行っているため、「全体順位付け体系」と呼ぶこととする。一方、西表、小浜、鳩間には「長兄」「仲兄」「末兄」の記載はあるが、三兄に関する記載はない。

3.2.2 姉妹の場合

姉妹の親族名称では兄弟の場合とは異なり、話者による差異がほぼなかった(表3)。姉総称は、基本的に男性と同じ *sizja* を用いる。長姉の *ho-Nma* (ホンマ) は **uhu-aNma* [大姉] からの転、次姉の *naka-Nma* (ナカンマ) は **naka-aNma* [中姉] からの転だと想定できる。*aNma* が姉を表す形態素だと考えられるが、現在の宮良方言では、*aNma* 自体を使わないという話者と、「母」を指すという話者と、「お婆さん」を指すという話者がいる。また、三姉を表す *amaama* (アマーマ) や *ama-ma* (アママ) は *aNma* に接尾指小辞 *ma* がついた **aNma-ma* [小姉] が元の語であろう。四姉以下は、話者Aは *amaa-ma*、話者BとCは「名前 + *amaa-ma*」だとする。よって、姉妹の体系も「長子、次子、三子以下の

(表3) 宮良方言の姉妹の親族名称

話者	姉総称	長姉	次姉	三姉	四姉	五姉	末
A	<i>sizja-bunarI</i>	<i>ho-Nma</i>	<i>naka-Nma</i>	<i>amaa-ma</i>			私
B	無	<i>ho-Nma</i>	<i>naka-Nma</i>	<i>amaa-ma</i>	名 + <i>amaa-ma</i>		
C	<i>sizja-midunaa</i>	<i>ho-Nma</i>	<i>naka-Nma</i>	<i>amaa-ma</i>	名 + <i>amaa-ma</i>		
D	? <i>sizja</i>	<i>ho-Nma</i>	<i>naka-Nma</i>	<i>amaa-ma</i>	名 + <i>neenee</i>		
E	<i>sizja-midunaa</i>	<i>ho-Nma</i>	<i>naka-Nma</i>	<i>ama-ma</i>	名 + <i>neenee</i>		
1930年	姉総称	長姉	次姉	三姉	四姉	五姉	
石垣	シーザ アンマ	シーザ ホンマ	ナカンマ	(アンマ)	アンママ アンマーマ	(アンマ)	
西表	アンマ	ホンマー	ナカンマ カンマー ガンマ	(アンマ)		アンマー (アンマ)	
小浜	アーマ	オーマ	ナカーマ			アマーマ*	
鳩間	アンマ	アンマ	ナカーマ	(アンマ)	アンマーマ	(アンマ)	

* (表2) の注2で述べたように、「末姉」の誤記だと判断し、ここに記載する。

三分割体系」だと言える。

『八重山語彙』を見ても、地域差があまりない。石垣、西表、鳩間には姉を表すアンマが見られる。よって、元々姉を表すアンマが八重山で広く用いられていたことが伺える。アンマの項には「①姉. ②三人の場合は、特に末姉を云ふ、(石垣、西表、鳩間)」と説明があるため、(表3)の石垣と西表と鳩間の三姉と末姉のどちらにも(アンマ)と書き入れた。石垣には、アンママの項で「第四番目の姉. 小さき姉.」と説明があり、そのすぐ下にアンママの項があり、「同上。(石垣、鳩間)」と説明がある。よって、石垣と鳩間の四姉に、アンママを加えた。石垣は、「大姉>中姉>姉>小姉」となるので、基本は「全体順位付け体系」と言えるだろう。

4 親が息子や娘を紹介するときの親族名称

4.1 黒島方言での諸相

共通語で、親が自分の息子や娘を友人に紹介するときは「長男」「長女」と言い、「長兄」「長姉」とは言わない。そこで、友人に写真を見せながら「これが長男です」のように息子や娘の紹介をするときに、どのような親族名称が使用可能であるかを調べた。

黒島での回答を(表4)に示す。長男は、sakusi(サクシ)で、これは「嫡子」であろう。次男以下は狭母音化の影響はあるが、漢数字を用いる点は共通語と変わらない。保里の話者は、長女を sakusi-midoo [嫡子-女]、次女を zinaN-midoo [次男-女]とも言えると指摘する。このときの zinaN は二番目の順位を示す。さらに、[長兄]を表す ubu-sje も使用できた。長男は ubu-sje、次男以下は naha-sje、末男は buza-ma か sjee-ga-ma、長女は ubu-na、次女以下は naha-na、末女は boo-ma と言えるという(表5)。東筋では、三男は sjee-ma とも naha-sje とも言え、三女は NNna-ma とも naha-na とも言えるとする。保里での NNna-ma は末女を指す。

(表4) 黒島方言で親が息子や娘を紹介する場合(漢数字)

集落	長男	次男	三男	四男	五男	末男
保里/ 東筋	coonaN sakusi	zinaN	saNnaN	junaN	gunaN	buza-ma
集落	長女	次女	三女	四女	五女	末女
保里/ 東筋	ubu-na	naha-na	saNzjo	joNzjo	gozjo	boo-ma
保里	sakusi-midoo	zinaN-midoo	saNnaN-midoo	junaN-midoo	gunaN-midoo	boo-ma

(表5) 黒島方言で親が息子や娘を紹介する場合(親族名称)

	集落	長男	次男	三男	四男	五男	末男
息子	保里	ubu-sje	naha-sje sjee-ga	○番目の naha-sje (五男は sjee-ma とも)			buza-ma sjee-ga-ma
	東筋	ubu-sje	naha-sje	naha-sje (三男は sjee-ma とも)			buza-ma sjee-ga-ma
	集落	長女	次女	三女	四女	五女	末女
娘	保里	ubu-na	naha-(N)na	○番目の naha-(N)na			boo-ma NNna-ma
	東筋	ubu-na	naha-na	naha-na (三女は NNna-ma とも)			boo-ma

(表5)の東筋の体系は(表1)と異なり、「長子、複数中子、末子の三分割体系」となっている。親だけでなく、他人も「〇〇家の naha-na」のように、中子と呼ぶことができる。よって、黒島の体系は「長子、複数中子、末子の三分割体系」が基本であろうと考える。

ところで、末男の buza-ma の buza は「おじ」で、buza-ma は「末のおじ」も意味する。末女の boo-ma は、「おば」の buuba に接尾指小辞 ma がついた *buuba-ma が boo-ma になったのだろう。「末のおば」も意味する。『全国方言辞典』には、「おじ」に「弟。次男以下。」の意味で、「おば」に「妹。次女以下。」の意味で使用されている地域が見られるが、琉球語との関連は不明である。^(註11)

4.2 宮良方言での諸相

宮良方言での回答は、話者CとEを代表してあげる(表6)。

(表6) 宮良方言で親が息子や娘を紹介する場合

話者	長男	次男	三男	四男	五男	末男
C	cakusI coonaN	zInaN naka-ccaa-ma	saNnaN azjaa-ma	junaN	gunaN	rukunaN cibi
E	cakusI	zInaN	saNnaN	junaN	gunaN	rukunaN cibee-ma
話者	長女	次女	三女	四女	五女	末女
C	ho-Nma coozjo	naka-Nma	amaa-ma	joNzjo	gozjo	rukuzjo cibee-ma ^{*1}
E	ho-Nma	naka-Nma	ama-ma	joNzjo ama-ma	gozjo ama-ma	rukuzjo cibee-ma ^{*2} ama-ma

※1 miiduN hwaa=nu cibi=juu (女の子の一番下です)とも言える。

※2 ittIN slta=nu utudoo-ma (一番下の妹)とも言える。

長男は cakuI (チャクスイ) で、これは「嫡子」であろう。他は漢数字を用いる。末男は、cibi (「尻」や「一番最後」を意味する) や、cibi に接尾指小辞 ma を付けた cibee-ma [末っ子] や、「ittsIN=sIta=nu utudoo-ma (一番下の弟妹)」など複数の言い方があり、男女ともに使用できる。utudu (ウトウドゥ) は弟妹を指し、接尾指小辞 ma がつくると一番下の弟妹を指す。黒島では末子の名称を尋ねると、buza-ma (末弟) と boo-ma (末妹) と即答されるが、宮良では話者は迷い、いくつかの言い方を並列する。つまり、宮良方言では末子を表す固定した親族名称がないと考える。話者 C は次男と三男を、接尾指小辞 ma をつけて、naka-ccaa-ma、azjaa-ma と言えりとする。しかし、他の話者 A、B、D、E は、親族名称は使用できないと答える。もし、aaza(a) や hu-cca(a) を使うと、自分自身の兄を指すことになるという。

ところが娘では、ho-Nma、naka-Nma、ama(a)-ma が全員使用できた。話者 D は長女を cakuI-midunaa [嫡子-女] とも言えるという。四女以下は、漢数字を用いた。話者 E は、写真ではなく、実際に姉妹が一行に並んでいる場面であれば、三女以下を「ama-ma です」と紹介できると言う。娘では「長子、次子、三子以下の三分割体系」が現れると言える。

5 親族名称の体系のまとめ

これまで出てきた体系をまとめると、以下のようになる。

黒島：長子、複数中子、末子の三分割体系

黒島東筋 (兄姉を指す場合)：長子、次子、三子の上位順位付け体系

宮良：長子、次子、三子以下の三分割体系

石垣：長子、次子、三子、四子、五子の全体順位付け体系

八重山の中心は石垣である。石垣では、三子をアジャ [兄] やアンマ [姉] 単独で指せた。長兄のフッチャ、長姉のホンマは接頭辞 [大] が付き、次兄のナカッチャ、次姉のナカンマは接頭語 [中] が付いた。重要なのは、複数いる兄と姉の中から [大] と [中] を位置づけることではなかったか考える。

しかし、黒島の「長子、複数中子、末子の三分割体系」では、[中] が一人に固定できない。一人に固定するために、黒島東筋では [小] で三子を固定し、結果として [中] を一人に限定したのではないかと考える。宮良も同じであり、[大] と [中] を固定して、三子以下は同等とする体系となっている。『八重山語彙』で、西表、小浜、鳩間の兄を表す親族名称に「長兄」「仲兄」「末兄」と記載したのは、黒島のように「長男は○○、次男は△△、一番下は××」という回

答があったからではないかと推測する。とすれば、黒島の「長子、複数中子、末子の三分割体系」のような体系は、古くから八重山に存在したのではないだろうか。それが石垣の体系の影響を受け、上位二名を固定する体系へと変化したのではないかと考える。

6 呼称の用法

共通語の呼称に関して、鈴木孝夫（1973）は、親族（家族）内の上下の人間関係を図示した上で、自己を軸にして分割線を入れ、対称詞の構造が（1）となることを述べる。共通語で弟が兄を呼ぶときは、親族名称を用いた「兄さん、お兄ちゃん」等となる。このとき、親族名称単独で「*兄、どこへ行く？」とは言えず、接辞「さん」等を付けて呼称とする。兄から弟への呼びかけは（2）で指摘するように、「*おい、弟」とは言えない。

（1）話し手は、分割線より上の人を普通は親族名称で呼ぶ。（p.151）

（2）分割線より下の者に親族名称で呼びかけることはできない。（p.151）

柴田武（1988）には与那国方言での呼称の用法として、三男は長男を *ubuda*（長兄）と呼ぶが、長男は三男を名前と呼ぶとの指摘があり、上記の構造と同じだと言える。だが、宮良の話者F（昭和27年生まれ男性、68歳）は、「フッチャー〔大兄〕の意味は知っていたけど、高校生ぐらいまで使わなかった」と話す。黒島保里の話者からも *ubu-sje* 等の言葉は「所帯を持つぐらいの年になって使った。島全体でそうではないか」と言われた。幼少期は自分の長兄を「*ubu* 兄さん」と呼んだという。「兄さん」という共通語の混入が理由ではなく、*ubu-sje* は子供が使う言葉ではなかったらしい。宮良の話者Aは、親族名称を「いわば位づけである」と指摘し、「家庭によっては早く教えて、子供でも使う家庭があった」と説明する。少なくとも黒島や宮良において、親族名称は子供は使用せず、大人として社会的な位置付けが確定する頃に使用されていたことを留意する必要がある。

6.1 下から上の者への使用

黒島の *ubu-sje*〔大兄〕や、宮良の *hu-cca(a)*〔大兄〕、*aaza(a)*〔長兄〕などの親族名称は、弟から兄への呼称として（3）のように使用できる。上位者への呼びかけなので、動詞は尊敬語となる。このとき、共通語の「兄さん」の「さん」

に相当する接尾辞はない。

- (3) naka-ccaa, zIma=gee=du ooru?
中兄、 どこ=へ=ぞ いらっしやる.連体
* 次兄、どこへいらっしやる?

また、血縁関係だけでなく、他人が用いることもできる。その場合、「屋号 + aazaa」ようになる。宮良の話者Cは、ho-Nma〔大姉〕であった人が結婚したあとも、周囲から「実家の屋号 + ho-Nma」^(注13)と呼ばれていたと話す。これは、aaza(a)〔長兄〕や ho-Nma〔大姉〕が、個人を特定する固有名詞的な機能を持ち合わせていることを示唆する。

6.2 上から下の者への使用

宮良の話者Bは、息子たちが成人して分家しているのであれば、親から三男に対して、(4)のように次男のことを naga-bijaa〔中兄〕と呼べるという。これは鈴木孝夫(1973)に「目上が目下と対峙する時に用いる親族名称が究極的には家族の最年少者を基準点にとり(中略)最年少者から見て、なんであるかを表す用語で示される(p.172)」とあるように、三男を基準にして「次男兄さん」と呼んでいるように見える。だが、(4)は幼少者に言う言葉ではない。

- (4) naga-bija=a, kaNga us=soo. saari ku=ba.
中兄 = は あそこ.に いる = 終助詞 連れる.連用 来る.命令 = 終助詞
* 次男は向こうにいるよ。連れておいで。

(4)での naga-bijaa は、〔中兄〕家として集落内で認識された位置づけを表すようだ。そのためか、親族名称は、上から下の者への呼称として対称詞の機能も持つことができる。黒島東筋の話者は、長姉が三番目の妹を呼ぶとき、通常は名前と呼ぶが、(5)のように NNna-ma とも呼べるという。保里の話者も(6)のように、長兄が三番目の弟を呼ぶとき、naha-sje とも呼べるという。末男を表す buza-ma、sjee-ga-ma や末女を表す boo-ma も呼称として使用可能だ。宮良でも、話者DとEは、通常は名前と呼ぶが長男から次男へ naka-ccaa とも言えると指摘する。話者Cは長男から四男に対して(7)のように「名前 + azjaa-ma」で呼べるという。長姉から次女、長姉から三女にも使用可能だ。ただし、末子

の utudoo-ma は、呼称として使用できない。

- (5) {setsuko/NNna-ma}, maa=ha=du para?
 せつ子 / 三姉 どこ = へ = ぞ 行く . 意志
 {せつ子 / *三女}、どこへ行く？
- (6) {tetsuo/naha-sje}, maa=ha=du para?
 てつお / 中兄 どこ = へ = ぞ 行く . 意志
 {てつお / *三男}、どこへ行く？
- (7) gija azjaa-ma, zIma=gee=du haru?
 ギヤ 小兄 どこ = へ = ぞ 行く . 連体
 *ギヤ四男、どこへ行く？

この現象は共通語と比べると特異に見える。だが、東京の八丈方言にも同様の用法があると金田章宏氏は指摘する。八丈方言では次女をナカという（木部暢子編（2013）参照）。金田氏は三根地区の親族名称と呼称について「長男 tarou、次男 zjou、三男 sabou、四男 sjou、長女 njoko、次女 naka、三女 tego、四女 kusu。下から上の者へは、zjou-sei（< zjou aseï 次男兄さん）と言え、上から下へは、そのままかメをつけて zjou-me（次男）、naka-me（次女）と言える。わらべ歌で、上の者が歌う時には呼びかけに zjou-me（次男）が使われ、下の者が歌う時には zjou-sei（次男兄さん）が使われる」と述べる^(註14)。このように、他の地域でも親族名称が上から下の者への呼称として使用できる例があるかもしれない。

7 まとめ

黒島でも宮良でも接頭辞（語）の〔大〕〔中〕と接尾指小辞の〔小〕を用いて、兄弟姉妹の順位を表した。兄総称を表す形態素として、黒島では sjeë、宮良では sizja、aaza(a)があり、宮良では〔大兄〕〔中兄〕〔小兄〕の複合語形式のとき、兄の形態素として *accaa、*bijaa、*a(a)zjaa があることが分かった。これらの形態素は現在の宮良で独立しては用いないが、1930年刊の『八重山語彙』を見ると八重山全体では兄を表す語として用いていたことが確認できた。姉総称を表す語は、黒島では NNnaa で、宮良では sizja で、〔大姉〕〔中姉〕〔小姉〕の複合語形式では、黒島では NNnaa を、宮良では aNma を姉の形態素として用いていた。aNma は現在の宮良では姉の意味で用いないが、『八重山語彙』では姉の意味でのアンマが確認できた。親族名称の体系は、黒島のような「長子、

複数中子、末子の三分割体系」が元々八重山にあったが、石垣の〔大〕と〔中〕の上位二名を固定する体系が影響した可能性を述べた。また、親族名称は、社会の中で個人を位置付ける機能を持つため、呼称として、下から上の者への使用だけでなく、上から下の者への使用も可能となることを述べた。この現象は他地域でも見られる可能性があるだろう。琉球語は今、消滅の危機にある。他地域の調査を、今後急ぎたい。

- (注1) 八重山歴史編集委員会編 (1954) 『八重山歴史』 p.269を参照。表の数値は、「大波揚候次第」という記録によったことが付記されている。津波に関しては複数の文献があり数値が異なるようだが、八重山全体で9,000人～9,500人ほどの溺死者がいたとされる。
- (注2) 以下、年齢は、2020年12月末時点である。
- (注3) 現在、新型コロナウイルス感染防止のため対面調査は控えている。親族名称について、これまでの調査の過程で大凡の語彙は把握していた。遠隔調査での電話の音声はスピーカーを介して出力し録音をした。
- (注4) [ɸ] は、ハ行転呼のため [w] になり、[w] が [b] となった可能性もあるが、宮良方言は、[uɸu] であるため、語中の [ɸ] は、ハ行転呼の影響を受けていない可能性もある。
- (注5) 保里の sjee-ma は、「下から二番目」のため、全体の人数が定まらないうと出てこない。東筋では当初、「sjee-ma は一番下」と言われたが、後日、三番目と訂正された。意味が揺れていることも考えられ、兄弟の一番下を指す意味もあったのではないかと思われる。
- (注6) 呼称で用いるとき、ピッチの上昇を [、ピッチの下降を] で表すと、aa[za]a となり、語末の母音が1モーラ分長くなる。その影響のためか、元はアーザだったが、現在はアーザーという形式もあるのではないかと考える。同じ現象が hu-cca(a) や naka-cca(a) にも見られる。
- (注7) ただし、話者 D は使用語彙ではなく理解語彙だという。
- (注8) 表にあげた島以外に、竹富、新城、波照間、与那国があり、それぞれの語彙が掲載されている。
- (注9) 実例として、宮良で「ガッチャー」と呼ばれている年配の方は次男であることが分かった。
- (注10) 宮城信勇著 (2003) 『石垣方言辞典』では、フッチャ (長兄)、ナカッチャ (次兄)、アジャ (三兄)、アジャーマ (四兄) が記載されているが、グマアジャーマの記載はない。
- (注11) 「おじ」の地域としては「庄内 (浜荻)・東北地方・長野・岐阜・北陸・滋賀県高島郡・三重県志摩郡・奈良県吉野郡・隠岐」が、「おじー」で「茨城県南部・千葉」があげられている。「おば」の地域としては「庄内 (浜荻)・山形県庄内地方・福島・新潟・茨城・千葉・長野・美濃・能登・隠岐」が、「おーば」で「富山」があげられている。
- (注12) 大野真男 (1990) では、石垣方言での末子を [utudu:ma] としている。宮良の utudoo-ma と同じ語だと考えるが、宮良では親族名称とは言いがたい状況である。

- (注13) 柴田武 (1988) に、与那国方言での兄弟姉妹の配偶者は、「たとえば、自分の兄の妻（あによめ）は、実家で長女であれば ubani、(中略) 自分の妹の夫は、実家で長男であれば ububa (男からは) または ubja (女からは) (以下略)」と呼ばれていることが述べられ、実家での呼称が継続されることが指摘されている。
- (注14) 私信にてご教示頂いた。だが現在、これらの語自体は死語化している状態だという。

【参考文献】

- 大野眞男 (1990) 「南琉球における親族名称の記述と比較」『岩手大学教育学部研究年報』49 (2) pp.17-34
- 木部暢子編 (2013) 「消滅危機方言の調査・保存のための総合的研究 八丈方言調査報告書」国立国語研究所共同研究
- 木部暢子 (2019) 「日本の危機言語・方言——奄美・沖縄の親族名称・親族呼称——」『東京外国語大学国際日本学研究報告』(5) pp.10-19
- 柴田武 (1988) 『語彙論の方法』三省堂
- 鈴木孝夫 (1973) 『ことばと文化』岩波新書
- 東條操 (1951) 『全国方言辞典』東京堂出版
- 宮城信勇 (2003) 『石垣方言辞典』沖縄タイムス社
- 宮良當壮 (1930) 『八重山語彙』(甲篇)(乙篇)『宮良當壮全集』8所収 1981年 第一書房
- 八重山歴史編集委員会編 (1954) 『八重山歴史』八重山歴史編集委員会

【謝辞】

本稿は、JSPS 科研費 JP16K02683、20K00547と、国立国語研究所共同研究プロジェクト「危機言語・方言」の研究助成を受けている。何年にもわたり調査に協力してくださった黒島方言と宮良方言の話者の皆様に心からの感謝を申し上げます。

(おぎの ちさこ・福岡教育大学准教授)